

「生きている者と死んだ者とを

さばくために、

栄光のうちに再び来られ、

そのみ国は終わることがない」

(ヨハネ5・24～29)

一、信条をめぐって

〈御子が存在しなかった時があったとか、御子は生まれる前には存在しなかったとか、存在しないものから造られたとか、他の実体または本質から造られたものであるとか、もしくは造れた者であるとか、神の御子は変化し異質になりうる者であると主張する者を、公同かつ使徒的な教会は呪うものである。〉(関川泰寛著『ニカイア信条講解』より)

これは、ニカイア信条(正式名はニカイア・コンスタンティノポリス信条)の前身とも言える原ニカイア信条(原ニカイア信条)の結びの言葉です。イエス・キリストは神によって造られた最初の被造物であって、神のご性質を帯びていたものの、神ではなかったとするアレオス派の教えを斥けることを意識した内容です。

このように見てまいりますと、信条の中に、それとは反対のことを唱えた人たちがいた痕跡を見ることができません。たとえば、今回取り上げました、〈そのみ国は終わることがありません。〉と

いう文言です。そこには、キリストの十字架と死、復活と昇天によって打ち立てられたキリストの御国は、御子であるキリストの役割が終わったら終わると考える人たちがおり、彼らをけん制する意味合いもあったようです。ですが、キリスト教会が正典とする聖書は語ります。ルカの福音書1章33節です。〈彼(キリスト)はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありませぬ。〉と。

二、生きている者と死んだ者とをさばく

ために、栄光のうちに再び来られる

イエス・キリストは再び来られます。〈生きている者と死んだ者とをさばくため〉です。〈生きている者と死んだ者〉とは、この世に生を享けた者すべてです。神は、すなわち、父・子・聖霊なる神は、人間をさばかれます。その人が生きていた間に犯したことの責任を問われます。神が一人ひとりをさばかれるということは、神がふれられない領域があることを物語っています。その領域とは、私たち的人格の中にある、最も深い領域です。おそらく、意志の領域に近いと思われまます。

聖句を見てまいりましょう。ヨハネの福音書5章28節の途中から29節です。〈墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、善を行つた者はよみがえつていのちを受ける

ために、悪を行つた者はよみがえつてさばきを受けるために出て来ます。〉と、主イエスは語られました。ですが、神のさばきは将来においてなされるだけでなく、すでに始まっていることを教えられます。それは自分の近くにいる小さき者に、神を見ているか否かによつてです(マタイ25章)。私たちが出会う人は、神が遣わされた人です。

主イエスは、善きサマリアびとの話をなさいました(ルカ10章)。ある人がエルサレムからエリコへ下つて行く途中、追いはぎに襲われ、瀕死の重傷を負いました。そこに、神殿に仕える祭司がたまたまその道を通り、倒れている男性を見ましたが、見て見ぬ振りをして通り過ぎて行つてしまいました。主イエスが語られた、「おまえたちがこの最も小さい者たちの一人にしなかつたのは、わたしにしなかつたのだ」という言葉から考えるなら、そこに倒れていた男性こそは、祭司にとつて神の御姿でした。そういうわけで、神のさばきはすでに始まっています。

ペテロの手紙第1章4章17節、18節を見てまいりましょう。〈さばきが神の家から始まる時が来ているからです。それが、まず私たちから始まるとすれば、神の福音に従わない者たちの結末はどうなるのでしょうか。「正しい者がかるうじて救われるのなら、不敬虔な者や罪人はどうなるのか。〉と、ペテロは語りま

した。パウロの手紙や福音書から読む聖句に比べて、やや異なる印象を受けるのではないでしょうか。ですが、それが大切です。

三、そのみ国は終わることがありません

キリストの御国の性質は何でしょうか。義と平和と聖霊による喜びです(ローマ14・17)。そして、終わることがないことです。おそらく、新しい時代になったときには、過去・現在・将来という時間の枠組みが無くなつてしまうのでありましよう。すなわち、永遠です。永遠とは、時間の縛りから解放されることであると思われまます。考えてみれば、イエス・キリストによつて父・子・聖霊なる神を知りますと、すでに時間という束縛から解放される御業が始まっています。その最たるものは、時間としては2千年前に十字架で死に、復活したイエス・キリストを、過去の歴史的事実であると共に、私の救い主として信じていることです。あるいは、過去に不幸な出来事、嫌な出来事があつたとしても、年月を経ると、すべて良いものになつていくと知ることです。過去と現在と将来の希望が一つになつていく祝福です。〈生きている者と死んだ者とをさばくために、栄光のうちに再び来られます。そのみ国は終わることがありません。〉を今一度かみしめて、主に感謝をささげようではありませんか。